

信州これから会議 -コロナ後の未来を語り合う- について

趣旨

- 様々な視点を持った方々がコミュニティを越えて集まり、一人ひとりのコロナ後の見通しを持ち寄り、未来をともに語り合うことを通して、信州のこれからを創造・共有。
- 展開された議論を未来像「信州のこれから」（仮称）としてとりまとめる。
- 次期総合5か年計画の策定等に役立てる。

進め方

- 6つのテーマごとにグループを分け議論を行う第1段階と、第1段階で出されたキーワードを掛け合わせて設定したテーマを議論する第2段階の2部構成で進行。
- 総合ファシリテーター (株)コトト代表 瀧内貫（たきうちとおる）氏

第1段階

テーマ

- ①働き方、暮らし方、②文化、スポーツ、③地域コミュニティ、④福祉、子育て、⑤産業、⑥学び

実施日程

令和3年11月～12月 各テーマ3回ワークショップ実施

開催方法

オンライン

参加者

クリエイター、教育関係者、医療・福祉関係者、行政職員、エンジニア、地域おこし協力隊員、学生等、公募に応じた55名

第2段階

テーマ

第1段階のキーワードを分野横断的に掛け合わせてテーマ設定

「これからの地域社会の編み方」 × 「これからの豊かさ、
「これからの暮らし（人生）のレジリエンス」 × しあわせをどう実現
「これからの支援する人をどう育てるか」 × していくか。」

実施日程

令和4年1月16日（日）、1月30日（日）、2月13日（日）
計3回

開催方法

オンライン

参加者

第1段階の参加者のうち有志18名

第1段階 進行

第1回

「コロナ下における変化をどう見ているか？」



第2回

「コロナ後、どう変化していくか？」

「変化をプラスに持つていくために何が必要か？」



第3回

まとめ/参加者の行動宣言



第2段階 進行

第1回

第1段階で出されたキーワードを掛け合わせて以下のテーマで議論

「これからの地域社会の編み方」
「これからの暮らし（人生）のレジリエンス」
「これからの支援する人をどう育てるか」



第2回

上記の3つのテーマを起点に、

「これからの豊かさ、しあわせをどう実現していくか？」
を考える



第3回

まとめ/参加者の行動宣言



展開された議論を未来像「信州のこれから」（仮称）
としてとりまとめ（予定）

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

時間や場所に縛られない働き方・暮らし方が普及

オンラインツールの普及により、テレワークが当たり前になってきた。また、コミュニケーション形態が多様化し、時間や場所に縛られない関係性が生まれてきている。一方で、リアルなやり取りや経験に対する価値観が変わってきており、目的や相手に応じたベストな対応が求められている。

② 新たな日常に向け工夫したことでわかったこと

変化する社会、多様な生き方を受け入れる地域と変わらない地域が二極化

多様な働き方・暮らし方を認め、魅力ある地域を発信している地域へ人が集まってきている。コロナ下で選ばれる地域、改めて住み続けたいと思う地域になるためには、地域としてどうあるべきか。

変化する社会に対する対応力に差が生じている

急激な社会のデジタル化への対応力に個人差が生まれた。情報格差が激しくなり、個人によって行動を選択できる幅が異なっている。

働き方・暮らし方のこれから

この地域で生きていく幸せを考え続ける。
生き方を再定義し、「働き方・暮らし方」を
選択できる地域社会へ。

① 常識を変革し、多様性を認め合う社会へ。
働き方をアップデートする。

変化する社会の中で、常識にとらわれない多様な働き方を実践する人が増えている。自分の好きなことを生業にする人、1か所にとどまらない働き方を実践する人。それぞれが「本質的な幸せ」を考え、自分に合った働き方を追求し続ける。

② 多様性から、職住が「接近」している。
「境目のない暮らし」を、新しいライフスタイル
の選択肢として定着へ。

家事、育児、仕事、介護、娯楽などの境界線を取り払い、一人ひとりが自由に暮らしをデザインする。従来の「ワークライフバランス」の枠組みにこだわらず、自分らしいライフスタイルを築く。

③ それぞれが、働き方・暮らし方の「実践」を
発信。多様なチャレンジを信州から。

多様なスタイルを認め合い、支援する社会の実現を目指す。それぞれが多様なチャレンジを踏み出し、県内外へ発信。Try&Errorを恐れない社会へ。

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

不要不急とされたが、生活の豊かさを彩る大切なもの

文化・スポーツはコロナ下では不要不急とされた。しかし、人と人を繋げ、生活を豊かにするために不可欠であると再認識。

一流の芸術に触れる機会がなくなった

もともと信州は大規模・著名な文化・芸術に触れるための施設や機会が少ない。移動制限で一流の芸術が県内に来なくなったことにより、一流に触れる数少ない機会が失われている。芸術レベルの底上げがますます遠のいている。

② 新たな日常に向け工夫したことでわかったこと

オンラインでは代替できない価値がある

オンラインによりイベント等が代替されたが、質感や空気感は伝わらず、共感も生まれにくい。また、観客の反応を感じられず作品や技術も向上しない。本物に触れ、場を共有することの価値が際立った。

足元の価値を拾う中で、地元と相互に影響を及ぼし合う

地域でアートが開かれるようになり、地域資源を活かした取り組みが活発になった。外からアイデアをもらい、地域は、これまで気づけなかったその土地の新たな価値を認識する。一般協力者や参加者が生まれる。

「文化・スポーツ」は不要不急ではない。本来の価値から、共感と交流が生まれていく未来へ。

① 文化・スポーツが暮らしに根付く社会を自らの手で。地域に暮らす自分たち自身が、街の文化を耕していく。

住民が地域にある文化やスポーツに興味・関心を持ち、一流でもカジュアルでも、すべてのプレーヤーが混じり合う社会。地域性や業界の垣根を超えて、街全体がアーティストやアスリートを支え、多様な文化やスポーツが暮らしにあふれている社会へ。

② 特異な才能と「出会える」地域に。あたりまえに活動できる環境と自然に交流できる状況をつくる。

どんなジャンルの一流でも不自由なく活動でき、技を高められる環境を整える。ロールモデルの彼ら彼女らがあたりまえに混じり合っている社会では、住民との交流も生まれ、後継者となりうる次世代の子どもたちを育てていく。

③ 文化・スポーツに触れる「タッチポイント」を増やしていく。多様な繋がりをつくる「繋ぎ手」を育てていく。

プレーヤーと受け手の両側の本音を知り、共通点を見つけ、双方向に良い影響を及ぼせるような仕掛けを作る存在が重要。一流とカジュアル、文化と文化、プレーヤーと受け手、都市と地域等、さまざまな繋がりを見つめ、支える存在に。

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

前例踏襲への問い

前例踏襲でやってきた地域活動の必要性を立ち止まって見直す機会になっている。

コミュニケーションが生まれるきっかけに気づく

慣例的な集まりが無くなり、楽になった一方で、そうしたコミュニケーションの場が深い人付き合いを生んでいたことに気付いた。

移住者の孤独

コロナによって若者や移住者が増えているが、地域とのコミュニケーションがうまく取れず、孤独を感じている人もいる。

② 新たな日常に向け工夫したことでわかったこと

画一的な行政サービス

地域の助け合いは普段以上に緊急時にその真価が発揮されるが画一的な行政サービスが代行するようになり、取りこぼしが起きている。

地域コミュニティのこれから

「地域コミュニティ」のありかたを考えていく。
これからの地域の「再定義の状況」を
どう迎えるか。

① 地域を繋ぐ「交流を生む装置」と「通訳者」があふれる地域コミュニティへ。

地域の共通言語や駄菓子屋・フリーマーケットなどの人が集まる場のような「交流を生む装置」。住民同士を繋ぐ「通訳者」。これらを地域内で溢れさせる。

② 一人ひとりが地域に関わりを持ち、自らが地域コミュニティを再構築していく状況をいかにつくるか。

行政が画一的に管理する領域でもなく、私的な領域でもない、そこに住む「みんな」で支えていく領域を、いかにして住民の主体性によって再構築していけるかが問われている。

③ 柔軟性に富み、変化を恐れない地域コミュニティとは。持続可能な地域のあり方を問い続ける。

移住者、若者、高齢者などの多様な価値観が混在する中で、一人ひとりの違いを受け入れ認め合うことで、居心地のよいコミュニティをつくっていく。

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

消費者の需要が量から質へと変化した

パッケージ型の「大量生産・大量消費」が通用しづらくなり質的な付加価値をもったカスタム型へ注目が高まった。観光においては人気スポットへの大量集客が難しくなり、地域内・少人数での旅行が注目されるようになった。

大規模を追わず、ターゲットを絞っていた企業は打撃が少なかった

多くの人に人気なわけではないが、ターゲットを絞り、強い結びつきのある顧客を獲得していた事業者は、コロナ下でも顧客があまり離れず、打撃が少なかった。

② 新たな日常に向け工夫したことでわかったこと

変化に対応できた事業者とできなかった事業者に分かれた

感染拡大から2年近く経過したが、緊急対応後に今後の戦略を考え、変化に対応しようとした事業者は比較的打撃が少なかった。

時代も環境も変化が予測できない社会に。

レジリエントな「産業」の稼ぎ方とは。

① 量から質への転換により「刺さる」サービスを。生産過程の質を付加価値に。

多くの人の興味を引くことを狙うのではなく、他者と競合しない個々の強みをそれぞれが見つけ、狙ったターゲットに深く刺さるサービスを提供する。独自の地域資源を活用して生産過程の質を付加価値にする。決して大きくないが個性的な取組みを知らせ、享受者とつながる媒体として、オンラインを使いこなしていく。

② 地域やセクターを超え、多様な関係者を巻き込み、その組み合わせから強くしなやかな地域産業を構築していく。

農林業者・観光業者・住民など、地域を題材として多様な関係者を巻き込み協力しあう。地域に根ざした事業者による新しく個性的な取組みと豊富なノウハウを活かしてスケール化・持続化できる事業者との組み合わせから、健全な競争関係を構築し、状況の変化に対応できるしなやかな産業をめざす。

③ 一時的な動きだけでなく「その先」を見通すチカラを養う。

コロナ収束後、一時的に需要のリバウンドが想定されるが、単純にそれに合わせて人材や物資を確保すると、需要が収まった際に供給過多となる。また人口減少は悲観的に語られることが多いが、それが追い風になる業界があるのも事実。あらゆる産業の従事者は、需要の大小に関わらず長期的に物事をとらえ、柔軟な戦略を立てることができる「視座を養う」ことが重要。

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

コミュニティの分断が加速、社会的孤立が顕在化

「自分がコロナに感染したら周りが大変なことになる」という意識から人との交流を控え、助けたい人を助けられない状況が生まれた。コミュニティの分断が加速し、もともとあった社会的孤立も顕在化した。

② 新たな日常に向け工夫したことでもわかったこと

オンラインという新たな選択肢とIT格差

オンラインで会えない人とコミュニケーションがとれたり、新たな事業やサービスが提供できるなどのポジティブな変化があった。子どもの発達面ではマスクによるコミュニケーションの制限から悪影響も懸念されるが、オンラインで遠く離れた友人につながることもできるなど、良い面もみられている。一方で、どうしてもITについていけない人との格差やそもそもオンラインツールを使いたくない人がいる等、個人の経験や価値観による生き方への多様な対応が求められている。

オフラインの重要性

体験学習などの経験や、その人が本当に必要としている支援を把握するためにはオフラインが必要である。

多様性を認め合い、誰一人として取り残さない、それぞれの自己実現ができる社会を目指していく「福祉・子育て」へ。

① 情報発信と共有の充実から、本当の社会的包摂を考え続ける。

コロナにより変化するスピードが増した社会の中で、個人を取り巻く環境はより複雑化が進んでいる。地域内の環境を観察し、異なる個人のあり方を知り合うこと。個別性、多様性を尊重し、積極的な環境整備、場づくりに関わっていく。

② つながり方の選択肢を増やし、誰でもいつでも社会参加できる仕組みを考える。

コロナ禍で、近所のお茶飲みや子育て支援センターでの交流など、情緒的な豊かさを支えていた日常でのつながりが薄れた。社会参加のツールであるオンラインサービスへのサポートをきっかけに、今後また訪れるであろう急激な変化のなかでも、個人の希望に沿ったつながり方を選択でき、社会参加できる仕組みを、協働によりつくっていく。

③ 身近な「誰かのため」を考え、行動する。 一方的な支援ではなく、相互の関係性で、助け合いが当たり前になる社会の実現へ。

誰かのために、自分は何ができるか。高齢者支援、障がい者支援、子育て支援等の専門性の上に、1人の人間として助け合う相互の関係性を構築できれば、個人と社会の「幸せ」の実現につながっていく。

現状認識（コロナで変わったこと）

① コロナを経験してわかったこと

学ぶ方法の多様化と選択肢の広がり

オンラインでの学びの進展により“オンラインの便利さ”に気付きツールとして浸透しつつある。学ぶことの選択肢が大きく広がった。

リアルの大切さ

一方で、人とのつながりなど“リアルだからこその価値”が再認識された。

つながることの必要性

学校教育以外でも、人とのつながり、大人と子どもの接点を持てる場（学びの入り口）が必要。

② 新たな日常に向け工夫したことでわかったこと

探求・問い続けること

自分に向き合う時間が増え自己研鑽する機会が増えた。自分がどう生きるか、どう生きたいかを考えることが大切で、それを実現するための手段として学びが必要。

主体性

パッケージ化された（受け身の）学びの“メニュー選び”だけではなく、自ら学びを“デザイン”する主体性が必要。

アップデート

大人が学べていない。いざという変化に対応しきれない人も。変化が激しく、長い人生を送る時代にあっては、教える側も教わる側もアップデートし続けることが必要。

人生100年時代の「学び」とは。 学び合いから、自分をアップデートし続ける 人をつくっていく。

① 急激で連続する変化に対応できる「人」に育つには。 主体的に問い続ける姿勢をマイプロジェクトに。

学びに終わりはなく、日常の様々な場面に気づきのタネが広がっている。変化の多い社会に対応していくために、一人ひとりが年齢関係なく問い続け、学び続ける姿勢と余白を持つ必要がある。誰でもいつでも学び始められる、きっかけとなる学びの選択肢を増やしていく。

② 教えると教わるが入れ替わり、コミュニティを横断する「学び合う」社会の構築へ。

大人と子ども、地域などのコミュニティに境界線はない。様々なバックグラウンドを持つ人同士がつながることで、新たな視点を得たり、新たな関係性が生まれる。世代や地域の垣根を越えた「学び合い」を日常の光景にしていく。そのつながりのタッチポイントをつくる。

③ 地域全体が学びの場に。地域の接点から学校教育自体にも影響を。

全ての人の学びの礎となる学校教育の現場も、変化に対応していく必要がある（そのひずみが学校以外の場を求めている）。教育現場の外側に多くの出会い（情報、人、場所など）に誰もがアクセスし、参加できる学びの場を整える。学びに携わるそれぞれプレイヤーが影響し合い、連携することで、学びの多様性と公平性を確保する。そのタッチポイントとつながる一步を踏み出す人を増やす。